東亞醫學　第十九號　昭和十五年八月十五日　（第三種郵便物認可）

第十九號要目

○治驗……湯本　求眞
○漢方の脈診に就て……安西　安周
○上海の名醫時逸人氏を訪ねて……本多　精一
○滿洲の旅……龍野　一雄
○日本醫事新報社の社說を檢討し
　滿洲國及中國の漢醫問題に及ぶ　矢數　道明
○修琴堂治驗……大塚　敬節

◆投稿規定◆

讀者各位の投稿を歡迎す。
題目、內容は時事、學術、文藝其他隨意。
長さは一〇〇〇字以下とす。

○滿洲建國の理想と吾等の使命
○橋田邦彥博士の文相就任の意義

滿洲建國の理想と吾等の使命

矢數道明

日本が民族的中軸となつて、日滿支その他の國々協力の下に、東洋國家ブロックともいふべき將來の高次國家を形成する上に、滿洲國の建國理想とその歷史的意義、及びその具體的實踐と並にそれが成果を知ることは頗る大切なことである。それによつて吾等が國民として、又日本の醫家として如何に對處すべきかの態度が決定される譯である。

大皇威の下、數知れぬ幾多の同胞が血を注ぎ骨を埋め、幾多憂國達識の士が身を以て建立した新興滿洲國に使して、それは全く僅かな日子で、又極めてその片鱗ではあるが、右に闡して敎へらるゝところがあつた。

盟邦滿洲國の建國理想とは何であるか、又その歷史的意義はどこにあるかといふことに就て、同國政府民生部敎育司長田村敏雄氏はその建國精神講話の中に於て、具さに過去の惠まれざる滿洲國の歷史を述べた上、次の如く說かれてゐる。

『滿洲建國と云ふものは、此の有史以來搾取に始まり、搾取に終つて居る所の滿洲に、初めて、新なる文化の建設、人類の理想を人類生活の法則、歷史的發展の理法に基いて追求達成せんとする意識的努力を生んだ。即ち要約すれば、滿洲國に於ける諸民族の生活態度の根本指導原理が、搾取から創造の根本義、眞義がある。そして民族鬪爭より民族協和への轉向、社會搾取より新文化創造、人類生活の眞の永久的な據點を建設せんとする此の目標に向つて、民族協和、唯仰よくすると云ふやうなこと、或は喧嘩しないと云ふやうな卑近な淺薄なものでなく、諸民族の久しきに亙る傳統的搾取生活から建設へ掠奪から創造へと云ふ理想追求を目標として、諸民族が各々その所を得て、その能力に應じてその社會的價値の高下に從つて、而も常により高きより大なる社會價値を獲得せんとして向上發展努力しつゝ、互に協力一致すること、これが滿洲建國の歷史的意義である』と。

而してこの複合民族の結成團結を全ふして、共同目標を實現達成するには、各民族間に指導民族といふものがなければならない。云ふまでもなくそれは日本民族であるといふ。田村氏はこの間の事情を次の樣に述べて日本民族の自覺を促してゐられる。

『即ち諸民族のうちに、最も勝れた世界觀を持ち、文化を持ち、最も高き人類の理想を、人類生活の法則に基いて達成實現せんとする熱意と實力とを持つ實踐的指導的民族があつて、之が中心となり、指導者となつて他の理想目標を同じくすべき諸民族を導いて行くのでなければならない。滿洲建國は日本を中心とする東洋國家團體結成の一段階であり、世界國家の前提要件たる東洋國家團體成立過程に於ける必然的所產であり、日本民族が中心的指導者とならなければならない。日本人は建國の道義的責任を體感痛念してそれに伴ふ努力をしなければならないのである。又日本人が三思せねばならぬことは、滿洲建國と共に日本國そのものが、その本質に於て飛躍的大發展を、なしたといふことである。眞の日本國が顯現したといふことである』と。

私共は、この理想と實踐とその成果の華々しきに驚異し且つ歡喜した。私は嘗て漢方と漢藥誌「新年の言葉」の中で、甚だ觀念的抽象論ではあつたが、素問の陰陽應象論の陰陽の概念を引用して、今事變は西洋陰の思想文明と、東洋陽の思想文明との鬪爭であり、陰陽二氣の消長生滅職であるとなし陰の氣は秋冬の如く天地閉塞の令で、その行ふところは奴隸を使役して植民地を作り、飽くなき搾取をこれこゝするが、陽氣は春夏の如く萬物化育の母であつて、その足跡よりは自主平和な獨立創造國家が育まれるといふ意味のことを述べ、吾等の使命としての日滿支文化提携について論及したことがあつたが、その觀念的抽象論が眼前に脈々としてその卓拔なる理想に燃え、果敢なる實踐によつてそれは未だ發展の道程ではあるが世界的驚異と云はれる程の成果を收め、未だ嘗て世界史上に記錄のない五族協和の實績を擧げて、やがて來るべき世界國家といふ人類理想の範を示してゐるといふことを云ひ知れぬ感謝と勇躍とを禁じ得なかつた。

滿支の文化はその歷史の示すが如く生滅常なく、一貫したる統一性發展性を缺いてゐる如くである。西洋の分析的コマ切れ的ではないにしても、少くも輪切的斷片的であるやうである。滿洲の漢方醫學の情態を見てその感を深くした。されば殊更漢醫は未知なる西洋醫學に對して恐怖と眩惑とを感じ、自己の立場に對して自信を失はんとする危險がある。それは現代醫學に對して未知なるが故である。それ等の漢醫の指導と素質の向上を測り、漢方醫學の本來的特殊性を現代に生かし、益々その學と術とを發展せしむる爲めに、現代醫學を修めて而る後漢方醫學に專念しつゝある、日本の新しい漢方醫家の使命がある。吾等は滿洲建國の具體的事實とその意義を認識し、一方に於ては國民として民族的立場から、一方に於て文化發展上醫學的立場から、その使命を痛感するならば、その理想達成のためにその字の如く命を使ひ捧ぐる覺悟が生れて來るのである。

（矢數生）

橋田邦彥博士の文相就任の意義

橋田博士が第二次近衞內閣の文相と決定した時、世人は驚いた。文部省の役人達も驚いた、何故驚いたか、意外の人物の登場に、橋田博士を知つてゐる人も、知らない人も、共に寢耳に水といふ感じであつた。而も橋田博士を知つてゐる人の驚きと、知らない人の驚きとには大きな間隔があつた。

橋田博士を知つてゐる人達は、橋田博士の文相に就任されたことそのことに驚くよりも、時代が早くも、ここまで來たことに驚くのである。橋田博士が文敎府の最高位に據らなければならない程に、時代は急廻轉して來たのである。昨年醫育刷新に關する橋田案が發表された時、醫界上層部は決して冷眼視したのであるが、今や、この理想案が實現可能の狀態の下に置かれてゐるのである。

凡そ國が衰亡に傾く時は、有爲の人物が下積となり、國が興隆に向ふ時は、今まで下積となつてゐた人物が、浮び上つて來るものである。筆者は東京帝國大學敎授で第一高等學校長であられる橋田博士を下積の人物だといふのでは決してないが、大學敎授、高等學校長の位置から、文敎の最高府の首腦者となられたことは、その飛躍がめざましく、かゝる有爲の人物が文部大臣として革新政策の一翼を擔はれたことは、頗る意義が重大である。われわれは此際橋田新文相をして思ふ存分に翼足を伸ばさしめ、革新政策實現の日の早からんことを期待するものである。之を歡迎しなかつたばかりではなく、實現不可能の理想案として、

漢方の百科辭典
漢方醫學大觀
—再版出來！—
定價一圓五十錢
日本漢方醫學會發行

治驗

湯本求眞

古方は究むれば究むる程興深く一生を之に從事するも到底滿足する事が出來ないと嘆息する次第である。隨つて其の妙處に至つては筆や口で述ぶ可きものでなく禪の所謂教外別傳不立文字で迷ひに迷ふた末に始めて忽然と悟る可きものと思ふ。故に成可く言はず語らず、又筆を執らぬ樣心懸けてゐるのであるが、大塚敬節氏の切角の勸告であるから近來の治驗二三を述べる。

一、板橋區在住の四十歳の自動車運轉手、感冒に罹りとて其妻投藥を乞ふ。別懇なる間柄なる故葛根湯加石膏九〇・〇小柴胡湯、桃核承氣湯去硝黃の合方二日分を與へしに其妻來つて往診を乞ふ、依つて診するに惡寒全く去り、寒熱往來、體溫四十度八分、口舌乾燥煩渴引飲。右肺下部に囉音を聽取し打診上輕度の短音を呈し、血痰を喀出せるを以て肺炎と診斷し桔梗白散一・五を頓用せしめた。翌朝妻君來つて曰く吐下後體溫八分を減ずるのみにて他に變化なしと依て小柴胡湯加枳實五・〇、石膏一五〇・〇桃核承氣湯去硝黃、瘍羅湯合方に起廢丸六・〇分三を與へしに、翌日電話ありて服藥後下痢一時間に一回なりと、甚だしき時は半時間に一回なりと、答へて曰く解熱の爲の下痢（水瀉性）なれば驚く忽れと、次日朝妻君來院して曰く下痢全く止み體溫三十七度二分なる故歸鄕靜養の爲めに一週間分の投藥を乞ふ。余之に從ひしに、後日患者來たりて曰く御蔭樣にて速效を得たりと。

二、福井市、三十歳女、產後腎臟病に罹り殊に膀胱部に劇痛ありて縣下諸病醫院の治療を受けたるに、始め大腸菌性膀胱加答兒と診斷さる效なきを以て關西某醫大に行きたるに腎臟結核と診斷され治療を受ける事二ケ月餘なるも思はしからざる故、歸鄕後は激痛耐へ難き時は麻醉劑注射に依りて鎭痛を計りつゝありと云ふ。余診して小柴胡湯、桃核承氣湯去硝黃當歸芍藥散三倍大建中湯 1/2 合方に滿滑散六・〇分三を與へたるに疼痛甚だしく輕快せるも、滿滑散を服すれば疼痛增劇すと云ふ故此の散の兼用を中止して目下治療中なり。余の此患者に大建中湯を與へしは、其の腹症によるは勿論なれども、往年埼玉縣粕壁町にて同症の患者に前同樣の處方（但し大建中湯は全量を用ひ加附子とし兼用方は用ひず）を用ひて三年間帝都の諸病院を歷訪して、效なかりしものに鎭痛的速效を得たるのみならず、全く健康に復したるの經驗あるによつて、意を決して與へたるものなり。而して兼用の滿滑散は淺田氏の所說に基きたるものにして、余は此の散を以て膀胱部の劇痛及び之に血尿あるを治したる經驗二三あるに依り與へたるに今回は無效に終りたり。

漢法の脈診に就て

安西安周

漢法の診斷學は望・聞・問・切の四診である（この四診に關して異說あるも今は論じない）

四診中の切とは脈を切することで、卽ち診脈のことである。この脈診は漢法の診斷上最も重要なる位置を占むるものであるから、古來より確固不動の定法があつて可なりである。所謂三部九候の說は、一見其定法の如くであるが、先哲の脈診に關する見解を檢討すると必ずしもこの三部九候說が脈診の眞理であるとも斷じられないのである。それでここには脈診に關する一考察をしてみようと思ふ。

一、內經による脈診

所謂三部九候の說は、素問・難經による診法である。その診法をさらに詳細にしたものが王叔和の脈經である。此等を代表するものとして內經により脈診とする。

この法の一例として古林正賴の「醫家大業要覽」にあるものをあげる。

左手寸口の脈は心膻中の氣を察す。左關の脈は肝膽の氣を察す左尺の脈は腎膀胱腹中の氣を察す。

右手寸口の脈は肺胸中の氣を察す。右關の脈は脾胃の氣を察す右尺の脈は腎膀胱膜中の氣を察す。これ內經の診法なり。

左手寸口は心小腸の氣を候ふ。左關は肝膽の氣を候ふ。左尺は腎膀胱眞陰の氣を候ふ。右手寸口は肺大腸の氣を候ふ。右關は脾胃の氣を候ふ。右尺は包絡三焦眞陽の氣を候ふ。これ難經の診法なり。

卽ち三部は手の橈骨動脈の一線上にある寸・關・尺又は（寸口・關上・尺中ともいふ）にして、この三部に於て瀉・中・沈（診者の按手の强弱による）の三法により三々が九候によつて診斷するといふのがこの脈診の通則である。各書により配當の臟腑には小異あるも、この三部九候の概念は鐵則である。

この脈診の詳細を知らむとする者は、前記の「醫家大業要覽」を初めとして、多紀桂山の「脈學併要」岡田華陽の「診家脈式」等を一讀すべきである。特に「診家脈式」は文章平易にして難解の弊なく、この種の脈書として肝要なるものである。

さらに漢法學派の見地からいふならば、この脈診は後世派の診法と稱することができる。なぜかならば後世派は其法を內經に採るものであるからである。

二、傷寒論による脈診

以上の三部九候說は極めて精微なるものであるが、この法を以て實際に無用なる架空の說であるとして排斥する一派がある。それは主として張仲景の傷寒論による脈法を信奉する學者であつて、三部九候の臟腑配當說は後世の妄言であつて、仲景の脈法ではないと主張するのである。

ここに其一例として「脈則」の著者原吾堂の說をあげる。

夫後世脈をいふ者は之を叔和氏に正す。而して叔和氏の脈を論ずるや、九表・八裏・九道、其數二十又四となす。脈に三部を設け寸・關・尺となし、每部三候、これを九候となし、之に配するに臟腑を以てし、之を推すに生尅を以てし、以て萬病を斷じ、死生を決す。其法脈經に詳見す。然れども其言濛々昧々として傍蹊多岐、是に於てか學者或は迷ひ或は惑ひ、其正路を得ることあるなきものは其故何ぞや。是皆己れを欺き人を誣ひ名を求め利を釣るの一計よりいでて、妄言空語、實に徵すべき者なきなり。嗚呼醫道の末路の弊歎ずべきの甚しきなり。

もし上表・八裏・九道、三部九候の說に拘して其法を求めば、則ち終身役々として之を學ぶも遂に醫事に益なく、反つて治を誤り人を謬るも亦また鮮からずとなす。

右の如く完膚なきまでに三部九候說を攻擊してゐる。

この傷寒論による脈診を述べたものは、前記の「脈則」及び中村壽庵の「仙景脈訣」などが代表的のもので、是非一讀を要する良書である。

さらに漢法學派の見地からいふならば、この脈診は古方派の診法と稱することができる。なぜかならば古方派は其法を傷寒論に採るものであるからである。

古方派といつても吉益流の如く脈は取るに足らずとして、專ら腹診によつたものは例外としなければならない。

以上の外、中莖暘谷の「切脈一葦」、喜多村拷窓の四診要訣（これは醫方啓蒙の附錄中の一章）、淺田栗園の「脈法私言」の如きも、傷寒論を主とするものであるが、前記二書の純粹なるものに比すれば、多く折衷的態度にあるものである。然し必讀すべき價値は十二分にある。

三、古脈法による脈診

內經による脈診は三部九候の說であつて、この說は鐵則である、と一應は述べておいたが、實はこの鐵則にも破邪顯正のメスを入れてゐる學者があるのである。

ここに其一例として「脈位辯正」の著者加藤宗博の說をあげる。

夫軒轅氏の時、未だ難經あらず故に三部の診あることなし。其寸口といふ者は決して三部の寸にあらず、今の所謂三部を通じて之を寸口といふのみ。三部を既に寸口となす。則ち其尺なる者も亦三部の尺にあらざることを知る。是を以て內經竟篇また關部の說あることなし。秦越人出づるに迨び、乃ち特に寸口を取り以て三部を創め、配するに十二經を以てす。夫尺內は既に三部の尺にあらず、脈行兩傍なく、經脈も亦季脇なし。則ち尺內の兩傍は則ち季脇なりの一句を得て、端なく是三部十二經の脈診にあらざるを知ること辯を待たざる所なり。如何んか後世脈診を以て解するに越人三部の診と苟くも相合强牽、說を爲さんことを求め、遂に許多の賢良をしてこれを邪路に導かしむ。今にして正を辯せずんば、何れの日か雲霧を披きて靑天に坐することを得んや。

卽ち內經の脈診は、難經・脈經の三部九候にあらず、所謂三部九候は後世の法で、內經の古脈法は他に存在する、と主張するのである。

この說をなす者は前記の「脈位辯正」の他海津子亭の「語道大素」村山南海の「古脈法圖解」がある。こゝには南海の書名よりとつて、假りに古脈法による脈診と題したのである。

然らば彼等の主張する內經の三部九候とはいかなる診法であるかといふ問題が生ずる。

その詳細は各の原著に就て知られんことを期待して、こゝには「古脈法圖解」の著者村山南海とはいかなる人物であるかを紹介する。

村山南海は伊勢の人で、名は維益、字は士謙、號は南海で、以文と稱し、復古堂は、その塾稱である。延享二年（一七四〇）に生れ、享和二年（一八〇二）に五十八歳を以て京師に歿したのである。

彼は儒學を京師に於けゝ寬政古學四大家の一人、岩垣龍溪に學んだ。龍溪は名を彥明、字は孟厚、

三善氏で、松蘿館は堂號である。文化五年十一月三日享年六十八で歿した。其門下より猪飼敬所（この人は淺田栗園の師である）の如き大家を出したことより推しても彼の學德の如何は知ることができる。

南海の醫學の師は小川無朔であるといふ。この小川無朔とはどんな人物であろか、後世派で有名な小川朔庵の子孫でもあるのか、後考を俟つ次第である。

とにかく南海は本書を讀めば判明する如く考證學派に屬する醫人であつて、特に脈學の眞訣を探究するに全精力を傾注したことは、左記にある著述書目九部中、その六部までが脈學に關するものであることからも推定ができるのである。

一、形體名義集
二、考古四診法
三、和漢諸家脈法考
四、宋版傷寒論正誤
五、古脈法圖解
六、古脈法圖解考證
七、傷寒六經考
八、三部九候論考
九、古經脈說難語解

九部の內、刊行されたものは唯一部の古脈法圖解のみである。本書は寛政八年の刻本であるから、彼が五十二歲の時である。

何故にこの脈學の研究大家村山南海の名が今日まで世に隱殁してゐたのであらうか、誠に遺憾に堪えない。今回拙譯を付して覆刻するに至つたのは、この先哲の遺業を弘く世に流布せしめむとする微意からである。

要するに漢法の脈診は、以上に說くが如く定則あるが如くにして定則がないのである。いづれが眞情であるか、それは學徒が遠く古典を漁り、それを自己の實試に徵して決定するの外はあるまい。

このことは獨り一脈診に就てのみいひ得ることではなく、實に漢法醫學全體に亙つての結論でもある。

上海の名醫・時逸人先生を訪れて

在上海　本多精一

去る七月三日、在上海屈指の名醫、時逸人先生を訪ねることにした。住址（住所）は上海邦人の所謂「河向ふ」と俗に呼んでゐる地域である。卽ち蘇州河の下流で、この河を越えて、西南部に方る所である。この地域は從來、國際關係の頓に險惡な發生基地であると稱せられてゐる。この日余は單身脊廣服を著し、先づ日本人勢力範圍である〝「虹口」サイド〟から右の蘇州河を連絡するガーデンブリヂを渡る。河の中央地點では日本軍の步哨と英軍の步哨とが嚴然として銃劍を肩にして警戒をしてゐるのが目に付く。軈て河向ふの橋礎に至れば黃包車人の一群に出遭ふ。そこで早速一車を招き、車上の人となり一路、風を切つて時先生の宅に趨つた。道路は近代文化の粹を集めた丈けあつて善く出來てゐる。車は暫らくの間は黃浦江岸寄りの通路を趨つて行く。北側はビル街で、丸の內街の樣である。これから右へ曲り北京通り、或は南京通りを橫切り、車はどんどん西北方に趨り約十八分を經過したかと想はれる頃、支那街らしい特有の臭ひが余の鼻に突いて來た。やがて車は停まつた。ここは上海英租界山海關路大通り東首三二六號時逸人先生の宅である。

現在は開業をなされてゐない樣である。普通の住宅である。刺を通じて這入れば書生が二人許り居り室內で何か仕事をしてゐる。玄關附近では下女が洗濯をしてゐる。

一寸悠つくりした風情である。軈て一人の書生が出て來て曰く。時大人は只今、學校にて出務中で不在なり、恐らく午後二時には御歸宅なされることでせうとの事である。余は時計を看ると午後一時である。では、一時間後に再び訪問することを書生さんに告げて家を出る。天氣は上々、附近の支那街を散步し乍ら、さる店で晝食を濟し再び時先生の宅を訪ねた。こんどは時先生は在宅であるとのことである、直ぐに書生さんに先導されて這入つて行く。時先生は歡んで余を迎へて呉れた。卓を圍んで快談すること約五時間、話題は色々と飛び出し隨分と永いものになつて了つた。

なにしろ、斯道軌を一にしてゐる故か精神的感情的動きが自づから、兩者の胸に迫つて來るのである。時逸人氏は齡の頃凡そ四十を五許り越えてゐる樣である。頭髮には幾分白雪が散見してゐる。然し禿げる方ではないらしい。體軀は小柄で聲調は極めて低い、實直質朴で頭腦明晰、微密、理性に長げ、どちらかと言へば學者肌の御仁である。今日に至る迄、相當長年月の間斯界のために御苦勞なされて來た樣に拜察される。

現在の時氏の仕事は、今後事變に因り離散してゐるところの同志並學生を可及的迅速に叫合し復興中醫士のよりよき發展に活動をなされ、加之、中醫々育事業に對しても熱心であり、目下「復興中醫」なる名稱の基に月刊誌を發行してゐる（自民國二十九年一月創刊號）實際行動としては「時逸人國醫講座」なるものを設け臨牀並學問的に日に月に御勉强を續けて居り學生も亦多い、時代の指導方針を大約すれば、基礎醫學としては洋醫學と中醫學との兩者を併採し臨牀醫學に於ては、中等治療を主體となして行くべきであるとの事である。

猶又、時逸人醫士に關して詳說し度きこと多々あるも、時間の餘裕なきため玆にて擱くことにする。

○逸人先生の經歷

江左時逸人、醫師年四十三歲、原籍、無錫、民國初年鎭江に遷居、民國五年より開業、爾來興醫學報餘姚衞生公報、杭州之二三醫報、南京醫藥衞生報等に屢々寄稿す、著述甚多。民國十七年上海に移り江左國醫講習所を創立、中國醫學建設問題に盡力なされ或は中醫專門學校並中國醫學院の教授を擔當せらる、民國十八年首に赴き山西中醫改進研究會常務理事となる。著述ものとしては時令病、傳染病、婦科、病理、處方、審査驗方等あり、其他山西醫學雜誌を主編せしこと十年に亙る、並に山西省衞生委員長山西國醫分館長、太原市醫師檢定委員、太原市中醫公會主席等を經て民國二十八年秋滬（上海）に至り復興中醫社を創立して中國醫學の整理事業に努力し今日に至る。

終りに方り御多忙中にも不拘、時先生の余のために鍾刻（時間）を割き下れしことを謝す。

時逸人氏を御紹介下されし蘇州の葉橋泉氏に感謝す。（終）

東亞醫學協會幹部
漢方各大家の合議研究製劑
である故原料の精選と處方の的確は絕對他の追從を許さない

皇醫　胃腸藥

本劑は一時押への局處的藥劑ではなく胃腸の活力を健康と同じ樣に恢復させる特點があるあらゆる胃腸藥にも滿足しない場合にこの皇醫胃腸藥は最後的良藥としておすゝめする。

45錠　.50
105錠　1.00
375錠　3.00

株式會社
東亞醫學協會研究所製品

日本醫事新報社の社説を檢討し、滿洲國及中國の漢醫問題に及ぶ（二）

矢數道明

本稿の大部分は七月號に掲載すべきものとして書いたのであつたが、六月下旬、私は急に滿洲國民生部からの招狀に接し、龍野一雄氏と共に新京に赴くことゝなり、準備に追はれて脱稿の域に至らず締切の期日も過ぎてつひそのまゝとなつて終つた。七月十一日東京を出發して二十三日歸京、旅程僅かに二週間であつたが、その間多少見聞するところもあり、本來ならば本稿も全く筆を改めるべきであるが、歸京後雜事整理の爲め暇がないので、出發前の草稿に少しく加筆して標題の稿を續け、渡滿の報告は追て適當な時機に發表することゝした。

三

醫事新報は云ふ。

『何分民衆の一般的知識水準は低く、而も夏期ともなればコレラ、赤痢等の傳染病猖獗を極める大陸のことであるから、その豫防治療を漢方醫學並に漢方醫に委ねておくことは大問題であり、その對策は緊要に考慮されねばならぬ課題の一つであらう』と。

吾等は勿論この說を全面的に否定せんとするものではない、がまた之を總べて肯定する譯にはゆかないのである。云ふまでもなく現代醫學の一大特徴は細菌學の發達と、それを基調とする豫防醫學の隆盛　防疫陣の一大整備である。滿支舊來のこの方面に於ける設備は皆無に等しく、到底漢方醫に期待することは不可能で、傳染病に對する防疫陣は早急に之が擴充を圖らねばならない。

然し乍らこれ等傳染病の豫防と治療は、漢方醫學並に漢醫には全く無能であらうか。なる程防疫學的豫防法に就ては殆んど無能に近いけれども、その治療的效果の優秀性に至つては到底西洋醫學の及ばざるところが多々あるのである。

こゝに漢方の治療醫學としての生命があり、一大特徴の存するところであつて、我が國では明治初年にこの防疫學的無能を以て、直ちに治療醫學的にも能力皆無なりと速斷し社會醫學として一顧の價値なしとして葬り去つたのであるが、寔に惜しいことであつた。

急性傳染病に對する漢方治療の優秀性に關しては、遺憾乍ら、我國に於ては未だ時期至らず、病院の設備をなしてその業績を發表したものがないが、京城府に於ては傳染病院を二部に分ち、漢方醫學の治療と西洋醫學の治療とを患者の自由意志に任せて受けさせ、その成績を比較研究した結果、明かに漢方醫學の卓越性が判然したといふことである。この業績はやがて發表されることゝ思はれるが、その時こそ漢方は慢性病にはよいが急性病は西洋醫學に及ばぬといふ樣な一般的な誤解は一掃されるであらう。漢方醫學の聖典と云はれてゐる傷寒論は、實にこの急性傳染病の種々なる病型に無數に變轉極りなく出沒して止まない生きた人間の病狀に向つて、その變化に應じて行ふ活機的治療法を記述した寶典である。

吾等も亦支那民衆の一般的知識水準の低いことは認めねばならぬし、コレラ、赤痢の猖獗することも考慮せねばならない。然し乍ら細菌の發生、その毒性の發揮は種々なる條件の下に始めて起るもので、細菌即傳染病といふ舊觀念はもはや或る程度迄訂正されなければならなくなつた。細菌は疾病の原因ではなくして却て結果であるといふ主張も近來一方の勢力をなしつゝある。こゝに於て細菌に侵される個人の體質が問題として取り上げられて來る。

中國人や滿洲國人のこれ等細菌に對する抵抗力と云ふか、免疫的素質といふか、その他の疾病に對する治癒力の優秀なることは、恐らく世界第一であらうといはれてゐる。所謂文化の溫室の中に培はれた文化人の尺度を以て之を測定し、之を强制することは出來ないのである。

クリスティーはその著『奉天三十年』に、いろ〳〵と所謂知識水準の低い原始的非科學的なりといふ支那醫學と民衆の無智を紹介した後次の樣に述べてゐる。

『支那人が病氣治癒に對してもつ最も價値ある財產は、驚嘆すべき彼等の恢復力である。ヨーロッパ人なら致命傷だと思はれる容態でも患部を接合したゞけで癒る。西洋ならば切斷手術をしなければ確かに致命的だと思はれる負傷や骨または關節の病氣が、自力で恢復して行く珍らしい例が絶えずあつた。神經的衝動に對する抵抗力も亦著しい。一人の男が鍛冶屋で、裝彈してあるのを知らず銃を修繕してゐた。それが發火して彼の手を擊ち拔いた。彼は靜かにハンカチーフを傷口に當て、切れた手首を片方の手で固く握りしめながら市の向ふの端から三哩歩いて我々の病院へ來た』と述べてゐる。

吾等は中滿兩國民が、それ等傳染病の猖獗から防疫陣の恩惠によつて救はれることは、衷心より希望するところであると同時に、所謂文化とか衞生とかいふ思想をはき違へて、自らの尺度を以て他を測り、親切の押賣りをすることの誤りなることを警戒せねばならない。でないとクリスティーの所謂彼等の最も價値ある財產であるところの驚嘆すべき治癒力は、やがて幾十年かの將來は日本のそれの如く國民體位の低下となつて酬らるゝことを覺悟せねばならないのである。こゝに私は防疫學的の豫防法の半面に體質强化的豫防法のあることを論じたが、それは兩國民の生活樣式の中に縫り込まれたる衣食住等風俗習慣を科學的に研究して見る必要があると思ふのである。例へば彼等信仰的に日常全く恒に攝取する特殊の食物の中に、又藥草の中に種々なる風習、養生法の中に、殺菌防腐醱酵制止作用のあるものが必ず存在するであらうことである。

斯くて防疫設備の必要は速やかに之を擴充すべきではあるが、さればと云つて傳染病に對する漢方醫學並に漢方醫は無能なりとは速斷し得ぬことゝなり、その優れたる治療的效果は益々研究されねばならぬと主張するものである。

四

同誌は云ふ。

『同仁會邊りでも、講習會開催の時など希望の漢方醫には聽講を許し、相當の效果を擧げた由語られたが、また新醫手薄の折柄、その應急處置として漢方醫の爲めの講習會を催し、醫學の速成教育を施す等の對策も考慮さるべく、傳染病豫防の爲めにも、漢方醫に迄十分手を延ばしておかねば防疫の目的は達し難き狀況にあり』と。

問題は漢醫の再教育に一轉したのであるが、漢醫に向て傳染病の講義をなし、その豫防消毒に關する講習をなすことは好ましきことであろ。斯くして漢醫も亦社會醫學としての防疫思想を涵養されて次第にその效果は擧つてくるであらう。然し乍らその治療法に就ては『狀態であり、ある者は西洋醫學の如く漢方醫學には漢方獨自の優れた療法があるので、漢醫にはその優れた治療法を益々深く研究せしむべきであつて、豫防の講義と治療法の指導とを混同することなき樣に注意を要する。それ故最も望ましきことは一般には傳染病の臨牀的診斷を教育して病名確定の上は然るべき病院に收容してその治療法は優れた漢方醫が行ふことである。朝鮮に於てはチフス患者の屆出を隨分奬勵したが、漢醫の治療によれば容易に治癒するのとそれ程蔓延せず、洋方の治療を受けると不幸にして死亡率甚しく多かつたゝめ、どうしても屆出の成績が擧らなかつたが、前述の漢方治療の病院が設立されるに及んで喜んで入院する樣になつたとのことである。

獨り傳染病に限らず、漢醫の西洋醫學的再教育は現代醫學を修めて而も漢方醫學を相當研究した人が爲すべきである。然らざるときはいろ〳〵な弊害を招來する。その失敗は既に朝鮮に於て明かであつて、京城帝大の杉原德行博士は『滿洲國漢醫問題に就ての私見』なる論文の中に於て、漢方醫の善導を論じ、次の如く述べて居られる。

『朝鮮に於ける一部の漢方醫は、神農遺業の看板の下に舊態依然として時勢に順應する氣魄も失せ、西洋醫學の隆々として榮える下に呻吟し、一部の漢方醫は西洋醫學の隆盛に憧れ、漢方醫學に於て掬すべき美點あることを忘れて、徒らに西洋醫學の片鱗を窺はんと欲するも、元來漢方醫學と西洋醫學とは其立論が全く趣きを異にするを以て、西洋醫學を了解し難く單に之を表面的に觀るのみにして、似面非なる西洋醫化するか、西洋醫とも漢方醫ともつかぬ、中途半ば者となつて、其進退に迷つてゐる』狀態であり、ある者は西洋醫學の治療法を學んで濫りに注射をなしていろ〳〵の弊害が續出してゐるとのことである。

然らば漢方醫の再教育は如何にすべきか、それは現代醫學を修めて而も漢方醫學を研究して、その兩者の醫學體系治療方針等につき各々の特徴を辨へたる新しい漢方醫がなすべきであつて、杉原教授の說の如く、それ等の新しい漢方醫を養成する研究を作ることが急務である。その研究所の內容に關しては改めて述べることゝしたい。

（未完）

漢方と漢藥

八月號概目

○人參を繞る問題……矢數　有道
○治驗三例……堀　均
○婦人體質と漢方治療……今村　昌一
○治驗三例……大塚　敬節
○治驗四例……三上　平太
○桔梗白散と紫圓……鮎川　靜
○治驗例……堤　皙
○診療餘話座談會……編輯部
○正觀湯治驗……矢數　有道
○治驗……多々良　素
○灸療雜話……代田　文誌
○治驗……吉原　淺吉
○編輯雜話……氣賀　林一
○其他十數項

修琴堂治驗

大塚敬節

第一例　眩暈

一婦人、年齢七十。數ヶ月前より頭痛、暈眩、耳鳴を訴へ暈眩の甚しい時は床にゐて安靜にしてゐても起り、夜中に醫師を招くことが屢々であるといふ。始め洋醫家の治を受け、ブローム劑を服用したが、却つて症狀は悪化する一方であつた。そこで某醫學博士に漢方の治療を求めた。處方に茯苓桂朮甘湯加減を本方とし、發作時には唐侍中一方を頓服として投與せられた。服用二ヶ月にして寸效なく當院に治を求めた。診するに、心下部膨滿し、大便秘結の傾向がある。最高血壓は百十mmで、脈沈、口渇はない。そこで柴胡加龍骨牡蠣湯を投ずるに、却つて耳鳴甚しく、服用に堪えぬといふ。余は當惑して、かゝる際に、屢々演ずる天狗飛切の術を使用することにした。余の天狗飛切の術とは何かと云ふに、方證相對してゐる如くに見へて、却つて病勢の悪化する際には、その方劑とは反對の處方を撰擇して使用するのを云い、此際余は白虎加黄連湯を用ひたのである。眩暈、耳鳴が、茯苓や朮の配劑された方劑でよくならず、却つて悪化するとすれば、此の患者の眩暈は水毒によるものではあるまい。却つて石膏、黄連の類を使用すべきであらうと考へた。果して一服にして目眩止み、一ヶ月足らずして、汽車旅行の出來る程によくなつた。

〔按〕此の患者に石膏、黄連を用ひたのは、原南陽醫事小言に眩暈には石膏、黄連を用ゆべき場合が最多いとあつたことに暗示をうけたのである。眞武湯をも考慮の中に置いたが、眞武湯證として眩暈には日常遭遇することが非常に少いので、度外視して、先づ白虎加黄連湯を用ひたのである。それでは此の患者の何處に白虎湯證があるかと詰問される方があつたら、余は頭を下げて降參するの外はない。しかし臨牀家として働いてゐるとこんな苦肉の策を演じなければならない場合がある。

第二例　慢性腎炎

これはひどく失敗した例である。紹介して下さつた藥劑師の方にもすまないと、今に忘れられない。

患者は三十七歳の男子で、病氣は既に一ヶ年前より起り、慢性腎炎の診斷の下に、洋醫家の治療をうけてゐたが、病勢は次第に募り最近は呼吸困難、息切れが加はり全身に浮腫が甚しい。肥滿した體質であるが、浮腫のため一層心下部は鞕くて膨滿してゐる。尿は十分間に一回位ひ、一回量は二三瓶から多くて一〇瓶殆んど出ない。大便も裏急後重があつて、仲々出ない。夜間はそのために殆んど眠れない。食慾も口渇もない。しかし仲々元氣のよい男で大言壯語をしてゐる。脈は沈濇である。

余はこれに木防已湯を與へようか、柴胡加龍骨牡蠣湯にしようかと考へて、後者を與へたところ、その夜は絶命するかと思はれる程の苦しみで、小便は一滴も出なくなり、呼吸は促迫し、洋醫家を呼んで注射も酸素吸入をして大いに騒いだといふことであつた。その後その患者は漢方にはこりたであらう。洋醫家の手によつて鬼籍に上つた。

〔按〕此の失敗に先立つ事十ヶ月程前に、一婦人が心臓瓣膜症に罹り、重篤に陥り、呼吸促迫喘鳴、浮腫、心下痞堅、脈沈濇を呈する者を診し、木防已湯を與へたところ、却つて病は激發して病人を苦しめ、遂にこれも洋醫家の手によつて鬼籍に上つた。この苦い經驗から木防已湯は沈濇の脈のものには用ひてはなるまいと考へ、更に大言壯語を柴胡加龍骨牡蠣湯條下の所謂譫語の一變形と見做して、柴胡加龍骨牡蠣湯を與へたがこれも矢張り失敗であつた。

第三例　痔核

二四歳の一婦人、痔核にて腫痛甚しく、歩行困難を訴へる。月經は二ヶ月に一回位にて、月經の初日には下腹が張つて苦しく、量は普通であるが、牛乳の如き帶下が相當に多い。その他の症狀としては左足がシビレ頭重がある。

處方は土瓜根散である。經に曰く、帶下、經水利せず、少腹滿痛經一月に再見する者は、土瓜根散之を主ると。又曰く、陰癢腫を治すと。服藥二週間にして痛苦去り帶下殆んど下らざる狀態となる。而るに患者は食慾少しく衰へ、大便秘するに至つたとて、一時服藥を中止した。

〔按〕土瓜根散を男子の慢性淋疾に用ひたことがある。效果は確にあつたと思はれるが、食慾減退、嘔吐が出て來たので、これも服藥を中止した。酒で飲ことになつてゐるのを、水で飲んだので、發散が悪るかつたことも一因であらうとは思ふが、使ひにくい方劑である。

第四例　顔面神經麻痺

三十五歳の男子、平素極めて頑健であつたが、五日前に突然顔の左半面が、ひきつれて、言葉がうまく出ない、中風ではあるまいかとて來院した。脈は浮大で、食慾は普通、大小便正常、その他別に苦しむ處はない。

續命湯、五日分を投與する。藥を飲み終つて來院した時は餘程よくなつてゐたので、引續き七日分を與へる。その後再び來院しないが、その人の店で働いてゐる職人が病氣で來院したので、主人はどんな風かとたづねると、あれから直ぐによくなつて、平生と變りはないといふことであつた。

〔按〕續命湯は金匱要略の中風歴節病篇の附方として次の如く出てゐる。

古今錄驗の續命湯は、中風痱、身體自ら收むること能はず、口言ふこと能はず、冒昧にして痛處を知らず、或は拘急轉側するを得ざるを治す云々と、而して此方は藥味より考へる時は、大青龍湯證の如くにして、血虚の狀ある者を治するの效があるものと思はれる。故に腦溢血に限らず、婦人産後去血の者及び老人小兒を兼治すとの註が付いてゐるのを注意すべきである。

第五例　眩暈

四七歳の稍肥滿した男子が來院して診を乞ふた。主訴は數日前より非常に暑い目に逢つてから食慾不振となり、食べると頭眩と悪心が起り、欠伸が多く出る。歩行するのに、身體がフラフラして困るといふ。口渇があり、小便は減少してゐる。大便は一日一行である。

脈は寸口が浮にして、關上、尺中は共に沈の傾向がある。腹部はどつしりと大きく、胃内停水は證明出來ない。處方として五苓散三日分を與へる。三日分を吸し了つて來院した時は、殆んど全治の狀態であつたが、念のために更に五日分を持參することにした。

〔按〕此の場合白虎湯、柴胡龍骨牡蠣湯、瀉心湯等をも考慮したが、全體の症狀を綜合觀察すると矢張り五苓散が適應する如くに思はれた。

第六例　肛圍膿瘍

五八歳の男子、生來病身の方であるが、大病に罹つたことはない。數日前より肛門の周圍に疼痛を訴へてゐたが、昨日より肛門の附近が腫れて來たので仰臥が出來ず腹這ひになつたまゝ一睡も出來ずに苦しんでゐるから、往診してくれといふ。

門を入ると伸吟の聲が聞え、挨拶も出來ない程の苦しみである。何處が苦しいかと訊ねると、昨日から小便が出さうで、一滴も出ず下腹がひどく張り、それに肛門はづき〳〵と間斷なく痛む。大便も出さうで出ないといふ。肛門から臀部の右側にかけて廣く腫脹し、病窓は可成り深部であるらしい。

とにかく先づ小便を出してやらうと、ゴムのカテーテルで導尿すると、いくらか氣分が落付いた。そこで大黄牡丹皮湯を與へる。翌日大便は少し出たが、小便は矢張り出ないから、往診してくれといふ。又導尿して大黄、芒硝を夫々九・〇宛にして大黄牡丹皮湯を與へる。その翌日、多量の大便が出たあとで、臭氣の強い膿がどつさり下り、それで疼痛の大半が去り小便も自然に出る樣になつた。引續き大黄牡丹皮湯を與へること一ヶ月餘にして、患者は平生の如く活動出來る樣になつた。

〔按〕此の患者は痩せて、眼の周圍が紫黑で、血色も悪るく平素は大便の秘することもなかつたが、一旦病氣になると、大黄芒硝を九・〇程用ひてそれで丁度よい程度であつた。あの人は實證だあの人は虚證だといふことを、漢方では屢々言ふけれども、病氣になれば實證の人が虚證となり、虚證の人が實證となることもあるのであつて、一定不變のものではないことがこの例でもよくわかる。筆者は肛門周圍炎で腫脹疼痛の甚しい者で脈に力があれば、大抵は大黄牡丹皮湯を使用してゐる。

第七例　胃酸過多症

二二歳の男子、脊が稍々高く、痩型で、顔色が土の樣で、一見しても胃に故障がある樣に見える。胸が重く、心下部痞へ、空腹時になると胃が痛み、時々ゲップが出る。大便は一日一行である。舌には苔なく、濕濡し脈弱である。胃部は抵抗感弱く、振水音を證明する。

處方は人蔘湯。

初診時に三日分、再診時に五日分、これで症狀が去つたので服藥を止める。

〔按〕筆者は胃酸過多症に人蔘湯を使用することは、そんなに多くない。胸が重いとか、胸に板をはめられた樣に感ずるとかいふ者に、往々人蔘湯證がある即ち金匱要略の胸痺心痛短氣編に『胸痺、心中痞、留氣、結ぼれて胸に在り、心胸滿、脇下より心を逆搶す、枳實薤白桂枝湯之を主る、人蔘湯も亦之を主るの條下にヒントを得たのである。

第八例　溜飲

十五歳の少女、二三日前より嘔吐があり、口内に稀薄な唾液が溜り、胸が何となく氣持がわるくて不快で堪らないとて診を乞ふ。色の白い痩型の體質で、脈は微弱である。手足が冷え易く、夜は仲々ねむれないといふ。大便は一日一行。胃内停水を證明する。

人蔘湯十日分を投與する。此方を服してから、嘔吐も止み、他の

症狀も輕快したが、全身に浮腫が出たとて來院する。よつて乾姜を去つて生姜とし、之に茯苓を加へ四君子湯として與へるに、浮腫も去り、そのまゝよくなる。

〔按〕人蔘湯を與へて浮腫の來る患者が屢々ある。殊に乾姜の量の多い時に然りである。これは注意を要する。

入門生の希望

沼滴生

漢方醫學に關係のある書籍を讀書し始めてから私も早や四年になつた今日、解らない乍らも實驗的に患者に投與して、病狀と體質とを考慮しつゝ、同樣症を新藥とその治驗能を比較して、時折同窓生同業者と談合の折、話題に載せて紹介したり、相當突込んで討論したりする樣になつた。が然し何日も問題になるのは、熱性病の現はす、三陽及三陰發生論及病候群症の分類及其意義とも稱すべき、太陽病、少陽病、陽明病等々。及虛實の型、葛根湯證桂枝湯證等の說明に甚だ困苦する。

疾病と全身反應の現はれとしての證と、局處的の爲害反應的局處反應としての病候の證明の相違は折角西洋醫學の生理學で學んだ人體內の機構及運用論を利用することなく、只直ちに漢方流の「太陽之爲病脈浮頭項强痛而惡感」を其儘說明しても病の一形態を現實的に表現するに過ぎず、疾病と身體生理論との間に何等の關聯をも意義付ける事が出來ずに終つて了ふ事である。

「理論はどうでも、治癒すればいゝ」

「理窟は後からどうにでもつく」であつても、三年もかゝつて學んだ醫學を少しも利用出來ないと言ふのは何だか國家に申譯がない。

又東洋學が悟りの學問であり、且教への學問でないにしても、要は悟り體得にあるのであるから、早く各人を體得の境地に誘導するには、先輩の苦しんで悟つた域に早く教導し、其若さの力を以て更に深遠なる域に迄到達せしむべきである。

又別事ではあるが、東洋醫學の西洋醫學者への肉迫は、治驗例の多少による力ではなくて、理論と實現に於ての力によつてのみ征服し得るものと考へる。

この意味から種々の生理學的說明が諸先輩によつて少しでも「證」なる事柄に對して鮮明に敎述せられる必要があると思はれる。

この事は「醫界の鐵椎」の著者によつても唱導せられた處で、今更若輩の云々すべき性質のものではないかもしれないけれども、轉じて漢方を疾病への最後の切札として活用してゐる狀態を見る時、又同業者への說得の方便としてのみの場合にさへ若輩の力にては生理學を運用する事不可能なる現在、諸先輪の斯道の蘊蓄を以て御指導あらんことを切に希望する次第である。

書中不遜の言辭の多きを憂ひて擱筆す。

小生渡滿中諸事務手落有之やと存じ候間若し御氣付きの點は何卒御遠慮なく御申越下され度く願ひ上げ奉り候　（矢數）

先般小生等渡滿に際し、種々御便宜と、貴重なる資料とを御惠與下され、一方ならぬ御厚遇を忝ふしたる

滿洲國政府民生部
京城帝大醫學部藥理學教室
滿洲醫大東亞醫學研究所
京城天一藥房
新京義和謙藥房

の諸賢に對し衷心より感謝申上ます。

昭和十五年八月一日

東亞醫學協會理事
矢數道明
龍野一雄

東亞醫學協會八月例會

滿洲國に於ける漢方醫學、
漢方醫の事情報告
理事　矢數道明氏
理事　龍野一雄氏

滿洲國政府の招聘に應じて渡滿せられた兩氏の視察談

時日　八月二十一日(水曜日)午後六時より
場所　拓殖大學講堂　—會費不要—

總頁堂々七百六十餘頁
昭和十五年度
拓大漢方醫學講座教材頒分

一、傷寒論金匱要略要方解說（一三六頁）　大塚敬節
二、漢方治療各論（一〇五頁）　木村長久
三、後世要方解說（三十七頁）　矢數道明
四、漢方治療各論（八十七頁）　矢數道明
　產科、婦人科、小兒科、皮膚、耳鼻咽喉、齒科、眼科
五、漢方醫學總論（八十六頁）　矢數有道
六、漢方藥物學講義（七十三頁）　清水藤太郎
七、漢方醫史學講義（九十四頁）　龍野一雄
八、鍼灸兪穴學治療學講義（一三三頁）　柳谷素靈
九、經驗藥方分量集（十一頁）

全揃**金拾貳圓也**爲替又は振替にて前金拂込の方には送料當方負擔、朝鮮、滿洲、中國は五拾錢增加。

申込所　東亞醫學協會
東京市牛込區新小川町二ノ七（溫知堂內）
電話牛込(34)二七七二番
振替東京一一九四三〇番

滿洲の旅

龍野一雄

今度の旅行は漢醫及び漢方醫學の將來に決定的な關聯を持つてゐると思ふとその使命の重大さに緊張せずには居られなかつた。民生部からは最初大塚先生と矢數道明先生に指名して寄越されたが、大塚先生は御都合悪しく私に代つて行くやうにお薦を受けたので、代用品で差支へなきやと當局に照會したり漢方の臨牀の特質現代醫學との對立、醫療制度等廣範圍に亙り、自分の考へを纏めるに苦心した。幸ひ栗原廣三氏から前以て當局の意向は大體輪廓を伺つて置いたので、目安を付ける上にどれ丈け心强かつたか判らない。あらゆる角度から觀て單に漢方自體の立場からのみでなく、現代醫學と對立させ、しかもその對立を超越した高度の觀點から見透しをつけて當局の諸問に答へやうと深く期する所があつた。

滿洲の前哨戰として先づ朝鮮の京城を訪れた。京城醫大の藥物學教室の石戸谷勉先生は本草學的研究で最も基礎的な調査を孜々として進めて居られるので、眞先におたずねした。先生は本當に本草學者らしい眞摯な學究といふやうにお見受けした。先生の論文を拜見すると如何にも潑剌たる筆勢が溢れてゐて、先づ三十六七位の方かと想像してゐた所、遙に御年配であられたのには驚きもし、且つ改めて尊敬の念を昂めさせられた。先生の方でも以前に南拜山氏が行つて漢方復興を唱導したので、今度來る內地の漢方醫もさだめし白髮の老人と思つて居られたらうが、豈圖らんや和製ロイドみたいな僕と、小關羽のやうな美髯の矢數先生なのでびつくりされたやうだつた。然し漢方が青年層に取上げられてゐる事實は大いに意を强くして頂けたと信ずる。お忙しい中をわざ〳〵京城一と云はれる天一藥房へ御案內下さつて、漢藥部長の金重夏氏、京都の田邊元博士の許で哲學を專攻された支配人の田元培氏、京幾道立醫生講習所講師で京城漢醫師會副會長の金煉煥氏を御紹介下さつた。南氏や杉原教授の御盡力で組織された東洋醫藥講習會の新、朝鮮の漢醫が典據としてゐる醫書として『東醫寶鑑』、方藥合編、醫學入門、景岳全書等が主なものであること、傷寒論は一般化して居らぬことなどを伺ひ、肺結核、蟲樣突起炎等の治療で意見の交換をし、最後に金先生は醫生の教育には現代醫學の知識も欲しいと强調された。次いで同藥房の倉庫を案內して頂いたが、貯藏箱は茶箱より稍小さい位の箱で二段にぎつしり並べられ、手前の方に蝶番ひの揚蓋がしてある。大體我々に耳馴れた品々だが芍藥などは割合に細く、當歸は大深などより白つぽく香が薄かつた。然し上等の當歸は掌を擴げたやうに縱に薄い片製としてあり、熟地黃なども實に見事なものだつた。劇毒藥は別室にあり烏頭、白附子甘遂などと共に雷丸も多量に貯藏されてゐた。當方の一回量は私の使ふ一日分よりも量が多い。それを一日二貼位飲むさうだ。

天一藥房を出て同勢は李王家の美術博物館を拜觀に行つたが、そこに清方畫伯の鏡獅子が陳列されてゐたので舊知に會つたやうな氣がした。

後で聞いたが、京城には官立の傳染病院に洋方と漢方科とがあつて、患者の希望で漢方科に入院することが出來るといふ。半島の人は殆ど例外なしに漢方科に入院するさうだが、治療成績が良く、傳染病豫防及治療上に大きい役目を演じてゐる由で見學し得なかつたのは返す〳〵も殘念だつた。

急ぐ旅として京城には一夜明かしたきりで直ちに新京へ立つ。汽車は丁度八ケ岳の中腹のやうに高原を走る感じがしたが、景色に變化がないのが物足りない。車中で一夜過し、新京に著くと防疫科長の張繼有、醫務科の豐田有康兩先生がホームまで迎へにお出で下さつたのには恐縮してしまつた。矢數先生は張先生とお知合だつたので話がはずんで漢醫の現狀や漢方存續と發展策に兩先生が並々ならぬ御盡力をして來られたことを伺ひ我々は言ひつくせぬ感謝の念を懷いた。然し大勢は必ずしも樂觀を許さぬらしく、內地から視察に行つた大家は筆を揃へて漢方撲滅を醫學雜誌に書立てゝゐるし、某外科の泰斗は漢方で治るやうな蟲樣突起炎は水を飲ませてをいても治るやうなことを當局者に說得して行くし、又某大學々長は態々來京して漢洋の二本立ては絕對不可の旨を建言して行つたといふやうな有樣で、當局は漢方の臨牀には明るくないし、その是非を判りかねてゐるとのことで、頗る漢方の旗色が悪い。然し先般渡滿された山崎博士が漢醫は是非存續すべきものであると主張されたことや、藥物の側の權威者は慶松先生、杉原先生をはじめ、漢方を支持して居られるといふ譯で、會議も相當波瀾を豫想されるだらうとの印象を受けたので、矢數先生は是ほどしても漢方の特質を縷說强調して漢方に對する迷盲を打破しなければならぬと大いに張切られた。

早速舊市街へ出掛けて行つて當地屈指の漢藥店義和謙に入る。店の次の部屋は漢醫の診察室になつてゐて右側に机が一脚置いてあり漢醫が二人患者に接對して居た。左側は丁度腰を掛ける位の高さの上り床になつて居て机が四つ並んでゐる。その机上には夫々高さ二寸餘の小枕が載つてゐて、患者はそれに手を載せて脈を診てもらふのだが、面白いことには先づ一側の脈を診ると醫者と患者が立上り右側に坐つて居た醫者が左側に行き左側に居た患者は元醫者の坐つてゐた側に行つて座り直す。但し斯う云ふやり方は何處でもやつて居ろ譯ではない。義和謙では漢醫が四五名居て絕えず患者も來るし往診にも入れ替り出掛けるといつた具合でなか〳〵繁昌してゐる。宅診は五十錢、往診は一圓と標記してゐるが、實際は患家や漢醫の格によつて謝禮するとのことで流行醫になると往診五—十圓は取るさうだ。

カルテを見ると姓名、年齡、住所、性別、職業、轉歸、診斷、既往症、主訴、現在症、一般營養狀態、脈、體溫、其他症狀、當方等の記載事項が印刷されてゐるが、現在症として、腰腹腿痛。一般營養狀態不良、脈沈濟、位の簡單な記載しかない。その患者には酒歸川芎、靈脂、川夕、乳沒、杜仲、川所、生耆、焦求、紅花、桃花、木瓜、桂、炙甘等の入つた處方が書かれてゐた。

診察法は先づ三部の脈を診る。それらこまかい患者の訴を聽く。最初は脈による一種の不問診をやろ譯だが、脈診の記載は前記の如く必ずしも三部九候悉くを擧げる譯ではない。腹診や聽診器使用などはしない。處方は大體に於て頭湯歌註と醫方集解によつて居て本草備要、經絡歌訣と共に清朝初期の汪昂の醫術を奉じてゐる。その他醫宗金鑑、醫學入門なども參考されてゐるらしいが、傷寒論素問の汪昂の醫術を奉じてゐる。その他醫宗金鑑、醫學入門なども參考されてゐるらしいが、傷寒論素問

になるとそれは良い本だと云ふことは知つてゐるが、一向讀んでゐる樣子がない。漢方の將來とか特質等についてはつきりした自覺と理想を持つてゐる人も殆ど稀である。何處へ行つても聞かされるのは洋方で治らぬ場合に漢方で奇效を奏することがあるといふことゝ現代醫學の知識を要望してゐることだ。然し洋方の奏效せざる間隙を期待するといふやうなカバーとしての役目、遠慮深さ、部分的、消極的な保存策は頗るあきたらぬ。

もつと全面的に進出して、一應洋方と對立させ、自己の特質と限界とを自覺すべきである。然し現在の漢醫は滿洲全體で一萬二千位（人口一萬に對し四人前後）居るが藥店を兼業してゐるものが最も多く、大都會で藥店に雇はれてゐるものが之に次ぎ、診察處方箋發行だけして投藥はせぬものが極めて少數に居る。即ち大體に於て自ら藥店經營者としての商業資本によるものと勤勞者として藥店の資本に從屬してゐるものによつて漢醫の經濟的基礎は構成されてゐるのである。これでは醫學の獨立化、醫業の純化は期待出來ぬのが當り前である。學歷も小學校又は私塾出が七四%を占めてゐて、それが藥店で四五年見習ひをした後地方の講習會などを歷て資格を修得したものが多い。從つて生活程度も田舍へ行くと一月二三十圓といふのも居る。尤もそれは醫業により收入で大抵他に副業を持つてゐるから生活出來るのだ。都會でも一—二百圓位が普通で、千圓といふのは數へる程しかないから經濟力が確保されぬ限り漢方醫學そのものゝ發達も容易ではないとの感を强くさせられた。

會議は七月十七日午後一時半から八時近くまで食事の時間を除いて殆とぶつ通しに熱誠溢れる意見の具申が行はれた。出席者は保健司の大平技監、家原軍醫中將、川上醫務課長、張防疫科長、豐田技佐、近森技正、張保健司長、村川新京特別市衞生處長、曹漢醫會々長、田村教育課長、杉原教授、岡西博士等（順序不同）の方々で杉原教授が藥理學の立場から漢藥漢方の優れた點を高揚され、矢數先生は漢方の東洋的性格を、私は漢方の臨牀過程と現代醫學と對立して將來止揚統一し新しき東洋醫學の樹立への前提としての漢方の意義を述べ、岡西博士は歷史的に見て滿洲醫學の將來性に示唆を與へられ、曹先生は現在漢醫が希望してゐる再教育問題を論じ、現代醫學知識の補修と標準的テキストを要望するとの意見を提出された。會議の進行につれて空氣は漢方に對し非常に親和的になり、併かも私共の豫想した通り現代醫學の枠內に踢跳せずに之を超越して遙に高度の觀點から新體制を建設しやうとする當局の意向がはつきり示されたのは實に愉快だつた。

新京へ來てつく〳〵感じたのは理想國家の建設に對する烈々たる意氣で、一種の壓迫感さへひしひしと受けた位である。お役人の事務といふやうな態度は微塵もなく我等の滿洲國を育てゝ行かうとする熱情には感激の外はなかつた。

さう云ふ次第で、會議の結論として漢方醫學存續の確保のみならず發展を圖るための國立東洋醫學研究所（假稱）の考慮まで進展し、我々も渡滿の使命の大半はどうやら果すことが出來た。是は皆當局側の寬量と、杉原、岡西兩博士の御努力に負ふ所が甚大であつたことを重ねてお傳へしてをきたい。

猶會議の詳細な經過や、我々に課せられた答申內容については決定前ゆゑ發表を差控へる。

會議が豫想外に圓滑にすんだので、翌日は遊覽バスで新京を一巡し寬城子南嶺の戰跡に忠勇なる我軍の奮鬪に感激の涙を禁じ得なかつた。（第八頁中段へ）

＝寫眞＝
天一藥房支配人　田元培氏
京城大學　石戸谷勉氏
東西醫藥協會常務理事
京畿道立醫生講習所講師
金煉炤氏
矢數道明氏
龍野一雄氏
天一藥房漢藥部長
金重夏氏
（平壤李王宮美術博物館前にて）

その翌日は奉天の東亞醫學研究所を訪れ、岡西先生に一方ならぬ御厄介になり、書庫の豐富さに一驚し、先生の御案内で河北虚龍の漢醫劉先生を訪れ脈軟心下痞鞕自利の症狀にはどんな方劑を使はれるかと聞くと人參健脾湯といふ處方を書いて下さつた。その中に鷄の砂袋を修治した内金や、麥芽山査子神曲を合した三仙といふやうな耳馴れない藥劑が入つてゐたので試みに店で一日分を調劑して貰つたら一日分二圓八十錢であつた。

滿洲の藥價は最低三十錢、最高六圓臺で、廉い所で五六十錢、普通一圓臺だといふ。それでは洋醫藥の方が安い。

黒天候や洪水の間を縫つて幸ひ豫定通りの旅行が出來、二十三日には無事歸京した。前記諸先生の御厚誼に與つたことを衷心より感謝し併せて在京諸賢の絶大な御後援によつて使命を果すことが出來たのを鳴謝する次第である。

池田千壽氏逝く

洋方醫學を學んで後、漢方醫學の研究に一身を捧げる樣になつた人達の中には、自分が病弱なるが故に、それに對する治療上の煩悶から、漢方へと轉向した人が可成多い。しかも漢方へと轉向し乍ら病弱なるが故に、思ふ存分活動も出來ず、白熱的の研究心に燃え乍ら、空しく白玉樓中の人となる同志の多いことは、われわれにとつて悲しい出來事である。

池田千壽氏は信州飯田の生れにして、松本高等學校を經て、九州帝國大學醫學部に入學し、昭和四年醫學士となつたが、在學中より病弱であり、キリスト教を信仰する傍ら鍼灸術に興味をもち卒業後代田文誌、遠藤誠氏等の手引によつて鍼灸術を研究し、後故澤田健氏の門に入つて、澤田流の鍼灸の蘊奥を極め、昭和五年澤谷區櫻丘に開業し鍼灸術を專門とした。昭和六年、漢方醫學の研究を志し、荒木性次、佐藤省吾、大塚敬節氏等と交り大いに古醫方の研究に盡力す。その後中野打越に轉じ、次いで大久保百人町に、みくに醫院を開設し、キリスト教の傳導と漢方醫學の復興に努力されつゝあつたが、昭和十四年七月三日突然、舊患突發し、臥床のまゝ年を越し一時快方に向ひ一、同愁眉を開いたが五時頃より再び病勢募り、遂に七月十三日、四十歳を一期に瞑目せられた。

池田氏は資性溫厚にして、未だ嘗て他人と爭つたことなく、名を誇らず、財をむさぼらず、道は生命より尊しとの信念のもとに、寢食を忘れて、斯道のために盡力せられた。今や我が漢方醫界は愈々本格的の活動に入らんとす。此の時に當り、前途有爲の同志を失つたことは愛惜に堪へない。

○本誌代納入者芳名

一金壹圓二十錢也　横濱　山崎　藍省殿
同　植木　要章殿
世田谷　宮前　次夫殿
麴町　海野　祺惠殿
千葉　秋山　禾門殿
朝鮮　全鳳　泰殿
金澤　長濱　軍雄殿
一金二圓四十錢也　桐生　野口　桑吉殿
一金壹圓二十錢也　澁谷　大河内義之殿
鶴田　弘毅殿

○東亞醫學會協會々旗寄附者芳名

一金壹圓也　拓大第三回　坂上　黄堂殿
〃　〃　可世木辰夫殿
全鳳　泰殿
一、五拾錢也　拓大第三回　海野　祺惠殿
一金參圓也　偕行第二　阿蒜　壽雄殿
一金貳圓也　偕行第二　渡邊　鶏子殿
一金壹圓也　拓大第一　西澤　生惠殿
一金五十錢也　會員　吳文通殿

○本協會寄附者芳名

一金五圓也　全鳳　泰殿
一金參拾圓也　矢數　道明殿

○寄贈圖書

一、東醫壽世保元　全鳳　泰殿

○滿洲國政府の招聘に應じて渡滿中の矢數道明、龍野一雄兩氏は去七月二十三日無事歸朝された。

○去る七月三十日、東亞醫學協會理事の諸氏によつて矢數道明、龍野一雄兩氏の歡迎會が、拓大の應接室に於て極めて簡素に開かれた。

漢方土曜講習

日時　九月より十一月まで三ヶ月間毎土曜
午後六時より八時まで
場所　澁谷區青葉町十五　安西醫院内
講師　安西安周先生
會費　一ヶ月拾圓也
申込は　八月末日まで
澁谷區青葉町十五安西醫院内
漢方講習會

【編輯後記】

○漢方の研究家は時代の先端を歩いてゐる。これは龍野一雄君の此頃の口癖である。筆者もたしかにさうであると龍野君に左袒するが、あんまり先端を歩いてゐて、足を踏みはづさぬ樣注意が肝要々々。

○橋田教授が文相に、内山教授が文相秘書官に、醫學博士が文相になつたのも、これが始めてだし、文相秘書官が醫學博士であるのもこれが始めてだ。時代は變つた。うんとガンバレ。

○湯本求眞氏父子一行は目下、北海道旭川に、武者修行とある。離病痼疾の退治を旗じるしに。本誌に採錄の治驗は、御出發の前に御書き下さつたもの。

○安西安周氏は最近の研究業績として、漢方の脈論を御執筆下さつた。最近は儒にして醫を兼ねた人々の傳記を主として研究してゐられる氏の脈に關する原稿は得がたいものである。

○矢數、龍野兩氏は滿洲から歸つて落付く間もなく、御寶の通りの力作を寄せられた。來る二十一日の八月例會は、兩氏の御土產話である。漢方の前途に光明のさす話がどつさり。遠慮なくいらつしやい〳〵。